The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	外国語の片仮名表記 : 偶感
Author(s)	古江, 尚
Citation	癌と人. 1996, 23, p. 12-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23898
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

外国語の片仮名表記－偶感

古　江　　尚*

何年か前，某大手薬品会社の依頼で学術ビデオを作ったときのことである。抗がん剤のcyclophosphamideをサイクロホスファマイド，cytarabineをサイタラビンとしたところ，当の学術部から抗議が来た。シクロホスファミド，シタラビンと直せというのである。が，私は拒否した。たしかに，日本医薬品集を見ると，シクロホスファミド，シタラビン，あるいはさらにmethotrexateがメトトレキサート，dexamethasoneがデキサメタゾンとある。しかしこれらは公式語ではあるが，あくまでも日本語を片仮名で書いただけのことであって，正しい発音を片仮名で表記したものではない。片仮名で書いてあるからといって，外来語と考えるべきでもない。

cyclo-はサイクロと発音すべきである。どうしてこのようになったのか，人によってはドイツ語流にしたのではないでしょうかともいうが，ドイツ語にはcyclo-という綴りはないし，cyclo-を肯てドイツ語風に発音するとすれば，チクロとでもいうべきであろう。しかし，幸いにして，わが国のがん学会やがん治療学会での発表を聞いていると，皆さんがサイクロホスファマイドとかメソトレキセイトなどと，日本語でなくて，英語風に発音している。大体，外国の学会に行ってシクロホスファミド，メトトレキサートなどと発音したら，まったく通じないだろう。それに，医師国家試験問題という公式の場でも，サイクロホスファミドと出題されているではないか（第80回，B-47番）。

憤懣やる方ない私は，私の内科のＳ講師に意見を求めた。彼は血液学が専攻で，従って抗がん剤に明るく，しかも最近までバッファローのがん研究所に長年，留学していた，ちゃきちゃきの洋行帰りである。必ずや私の肩を持ってくれるに違いない。ところが，彼の返事は以外にも，“先生，日本では両方とも正しいのではないでしょうか”，というものだった。しかし，そうかも知れない。片や純然たる日本語，片や英語の片仮名表記だから。

ただ，外来医学用語を片仮名で表記する場合に気をつけなければならないことが多い。今までに無数の外来語が導入されているが，それぞれの言葉が，それぞれの歴史，背景を引きずっている。またわが国に入ってから長い年月が経って，その表記が固定化したものもあれば，未だ入って間もない言葉もある。いずれを使うにしても，それぞれの背景を弁えたうえでなければならない。

そういう点で，人名などは特に気をつけなければならない。御存知のように，明治以来のわが国の医学の発展に，ドイツ医学の果たした役割は大きい。それが世界第二次大戦の終結とともに，わが国の医学もアメリカナイズされていった。ドイツ語に代って英語が用いられるようになっただけではない。内容も一変した。人名などもそうである。例えばBuerger病がある。タバコ喫みに多いが，原因不明の，四肢の血管が狭くなる病気である。バーヂャー病（正しくはバーガー病と記すが）と発音する。しかしわれわれはBürger病と習った。Bergmannの書いた有名なドイツの内科学にもBürger病とある。

* 大阪癌研究会一般学術研究助成選衡委員，帝京大学医学部第四内科教授

ビュルゲルと発音する。英語はumlautenしないので，ドイツ語のUmlautではeを余計につける。だからBürgerを英語流に書くとBuergerとなり，発音もビュルゲルがバーヂャーと変る。もっとも当の本人は米国へ行ったわけだから，それでも良い。ボストンのマサチュセッツ総合病院脳外科のHochberg先生はドイツ語流に発音するとホッホベルク，いわば高山さんといったところだが，御本人はホックバークと名乗っていた。

しかしである。Virchow（ウィルヒョウ）博士は1821～1902年のドイツの大病理学者で，われわれ若輩から見ると，まさに伝説的ともいえる。今でも彼の名前は，例えばウィルヒョウ腺とか，がんの原因としてのウィルヒョウの刺激説，その他に名をとどめている。ところが，米国でヴァイヤコウと呼ばれているのを聞いてびっくりしたことがある。やはり人の名前など，なんでも英語化して発音しないで，その人の母国での呼び名に従っていうべきであろう。

しかしこのことも決して容易ではない。英語，ドイツ語，あるいはフランス語まではなんとかなるが，それ以外となると，ときに大いに迷うことがある。本年も，11月に第3回日佛がんシンポジウムのためにパリを訪れたときのことであるが，文献でしか名前を知らないAbigerges博士の業績について，当の御本人の前で，言及しなければならない羽目になった。しかし御本人の前で名前を正しく発音しないと失礼に当るわけだが，それがよく分らない。そこでこっそりとフランス側の会長さんのところに伺いにいったところ，彼はフランス人にしてフランス人にあらず，従ってアビーヂャヂスと呼ぶのが正しいと教えてくれた。人名をそのひと固有の名前で呼ぶということは，私のように学生に教える立場にある者にとっては，大変大事なことである。ただ医学用語については，幸いにしてステッドマンの医学辞典が人名を片仮名でも表記しているので助かる。

しかし，他の領域についてはまごつくことも多いし，われわれ日本人にとって，文字も，言葉の配列もまったく異なる外国語を正しく理解するのは，なかなか難しいのかも知れない。例えばBeethoven。ドイツ語のthはhがsilentになるのでthemaはテーマと発音する。しかしBeethovenはBeet-hovenだから，正しくはベート・ホーベン。たしかに，外国人は，特に音楽関係，映画関係の人はビート・ホーベンといった風に発音している。Caesarは英語流に発音するとシーザーだが，ドイツ語ではカエサル。たしかにCaesarはドイツ語ではKaesar，従ってカエサル，またはカエザルとなる。それにカエサルの方が正しい。広辞苑，その他を引いても，シーザーのところは“カエサルを見よ”とだけしか書いてない。そしてカエサルの項に縷縷としたためてある。もっとも，このように完全に日本語化したものまで，気取ってベート・ホーベンとか，カエサルと発音してみても仕方がない。ö(o-umlaut)の発音はわれわれ日本人にとっては特に難しい。例えばGöthe。しかし“ゲョェテとは，俺のことかとゲーテいい”という川柳がある。まあ実状を心得ておくことは必要だが，大勢に順応するというのも大事なことであろう。